かがみがはらの

むかし

各務原市

高齢者大学院

各務原市図書館蔵書
昭和
54. 6. 6
495
寄贈

昭和54年6月6日
各務原市教育委員会
社会教育課 氏寄贈

発刊によせて

教育長　水口一也

昭和五十三年度の高齢者大学院に学ばれている二十三名のみなさんが、この度各務原の「むかし」を発刊されることになりました。まことに喜ばしい限りであります。

大学院のみなさんは、それぞれ、高齢者大学で三年以上学習を積まれた方たちばかりで、自分自身の生きがいについては、深いご理解と実践力をお持ちであります。その方たちが、仲間同志の生きがいづくりとして、力を出し合ってこの大きな事業に取り組まれたことに、心から敬意を表わすものであります。

また、この事業の内容が時宜に適し、すばらしいと思います。昨今のように社会情勢の変化の激しい時、新しいものにのみ価値があるかのような錯覚に陥り、古くから伝えられたすぐれた価値のあるものが見失われがちであります。とくに各務原市は人口の増加が甚しく、戦前からの住民が五十パーセントを割った現在、大学院の方々が、自分たちの力で昔のよいもの、失われていくものを残こそうとして、この事業を手がけられたことは、まことに意義深いものがあります。

集録されるものは、民話・方言・むかしの遊び・むかしの歌・伝統技術ということで、はば広い分野にわたっていますが、これらを収集されるには、大変なご苦労があったとうかがっております。でも、何度もこのために会合を開かれ、綿密な計画を立てられ、その上で、文明の利器であるテープコーダーを片手に、さっそうと目的地に向われた姿を想像するとき、明治青年の心意気が感じられ、嬉しくなります。

「むかし」が失われつつある現在、私たちは、子々孫々のため、各務原市の輝かしい未来のために、むかしの心、ふるさとの心を伝えていくのがつとめであります。ここに改めて高齢者大学院生のみなさんに厚くお礼を申しあげ、ごあいさつといたします。

郷土の民話

目次

石のたたり……1
阿呆綱……4
大安寺の水……7
雷の手……9
お地像様……11
家宝の鏡……12
餅つきの由来……14
紅唐椿……16
延命地蔵観世音……17
山の子……18
前渡の弁天様……20
三井神社と竜神様との争い……21
ハオカ山の盗賊……22
狐火……23
白鷺の湯の由来……24

丸太が石になった話……25
おくりキツネ……26
瑞眼寺のお稲荷様……27
勝さのこと……28
石臼を引く歌……30
おならと太平……31
小佐野巴馬頭観音の由来……32
芦原のお稲荷さま……33
大杉物語……35
お稲荷様の白狐……39
行念寺の昔話……40
御野国各牟郡各務郷字城之屋敷今昔物語……43
狐にだまされているのを見た話……46
はがれの源さん……48
長者様とおこんこん様……50
手力神社と天狗……52
キツネと博打……54
夜叉ケ池……56
狐の思い出……58
今須村妙応寺の建てられた由緒……59
狐にばかされた話 (一)……61
〃 (二)……62
孝行物語……63
各務原の石神様……66
おのぶ様と狐……67
いも堀長者……69
郷土の方言と民話 探訪記……71
その一……72
その二……74
その三……77

各務原市図書館蔵書

石のたたり

「おい」あの無染寺の南の辺の、荒れようはどうじゃ。ちょっとみんなでならそうか。」
「そうじゃなあ、ここらでちょっと一服してからかかろか。」
「助さも和さもええな。」
「いいとも、いいとも。」

「さあ、鎌でももってこよか。」
やがて道具を持って勢揃いした一同は、腰までのびている草をなぎたおし、草の山をやいた。
「オイ!!　そんでも土が見えるようになったなあ!!　一息入れたら、そこここにある石ものけよか。」
「そうじゃなん、そうしよか。」
この場のリーダー格の新さの意見に、みな賛成して石ものけた。
「どうじゃ、マアどうにかみれるようになったなあ!!　みんなご苦労さん。サ、かえるとしようか。」
みんなそれぞれ道具を持って、家へ向かった。

「オイ!!　和さが、夕方家へかえるなり、急に気分が悪うなって、頓死したげな。」
「オイ!!　オイ!!　大変じゃ、助さも夕べ九時ごろ、医者も間にあわず、急死じゃと。」
「マア!!　おそがいこっちゃ!!　おそがいこっちゃ!!」
ゆうべ夜中に、新さの嫁さのお里さが、夢でうなされて、頓狂な声を出し、ふるえがとまらなくて、うち中大さわぎ……。
　ようやく取りおさえて、おちつかせ、ボツボツ言いだした話によると、真夜中ごろ、急に寒気がおそってきて、思わず知らず蒲団にしがみつくと間もなく、青ざめたすごい顔をした男が、五人も六人も、あっちへユラユラ、こっちへフラフラ、そして、
「おれ達は、あそこで信長にやき殺された怨霊だ!!　たたってやるぞ!!」
と言いながら、何度も振り返えり消え去ったとか。
　話し終るとお里は、またふるえ出した。そばにねていた主人の新さも、急に苦しみ出し、家族は、ただただうろたえるばかり……。
　子どもたちの泣きさけぶうちに、間もなく新さも、目をむいたまま、苦しみもがいて、朝方とうとう死んでしまった。
　伝え聞いて、村中は大さわぎ……

「おそがいこっちゃなあ!!　一晩のうちに、三人も悶死とはなあ!!　そういえば、あれ達は、きのう無染寺の南の草刈りと、石のけをした者ばかりじゃないか？」
「そんなら、あそこでやき殺されたとかいう者の、たたりじゃなかろうか？」
「そうじゃろうか。」
「おお、おそが!! おそが!!」
「そんならあの石を、丁寧にもとのように置きなおし、お経をあげ、おやしろを建てて、この土地を守ってもらおうじゃないか。」
「そうじゃ、そうじゃ。」

やがて、石をもとどおりにおきなおし、無染寺の境内にお天王様をまつることによって、この土地に 無事な月日が めぐりくるようになった。

阿呆綱

むかし木曽川べり、今の神置町のあたりに、貧しい百姓一家が住んでいた。栄太は、そこの十オになる小伜である。

父は、毎日各務野へ朝暗いうちに、開墾に出かけていった。

栄太は、寺小屋からかえると開墾地の切株を大八車にいっぱい積んで、帰ってくる父を阿呆綱をもって、迎えにいくのが仕事であった。

十月も終りの頃のある日、おとっつあんが栄太に、

「今日はなアー、いつもよりたんとつんでくるからのう、天神様の鳥居でなくて、もっと向こうの出会うとこまで迎えにこいよ。」と、いってでかけた。

栄太は、今日も寺小屋からかえるとすぐ、いつものように阿呆綱をもって、

「夕焼けこやけで日が暮れて……」と、元気よく唄いながら綱を手にまいたり、首にかけたりして、堤防を東へ東へと行った。

上中屋の天神様まできた。「いつもなら、ここでええのになア。」とつぶやきながら通りすぎた。松本の白髭神社まで来たので、東の方をみたが車らしいものは見えない。

下切まできた。さてここからが大変である。あたりに家は一軒もなく、北側には松の大木が、うっそうと繁り、南側は茫々とした河原で、はるか向こうに木曽川が見える。日は西の山近くに傾いている。鳥が二・三羽、カア、カアと鳴きながら飛んでいった。栄太は心細くなって

「早くおとっさんがこんかなアー」と前方をすかしてみたが、それらしいものは見えない。

「誰かくるとついていけばええのに……」とつぶやきながら何べんふりかえってみても、犬一匹もいない。

「おそがいからここで待つことにしよう。」ときめた。しかし、けさのおとっさんのいったことを思い出すと、いかんと叱られるし……しばらく立ちどまって思案した。

そして、何度も何度も、あたりを見廻したが、人影らしいものはない。時々、松風が「ゴーッ」と音を立てるばかりである。

「こわいなア、おそがいなア、どうしょう、どうしょう。」そのうちに

「よし！　俺も男だ！　行こう！」と勇気を出して、大決心!!

そして後もみずに駈け出した。

十五・六間も、行った頃「オーイ」と呼ぶ声がする。「さっき、あれほど何回見廻しても、誰もいなかったのに。」と思うと一層こわくなって走った。

すると、前よりも大きな声で「オーイ、坊や」とまた呼ぶ声、あたりはうす暗いのに、あごに長い白髭の大男の姿が見える。「ゾーッ」として立ちすくんでしまった。するとそばへ来て、

「こんな、うす暗くなったのに、一人でどこへ行くんだ。その綱は……。」と、やさしくきいたので、ぶるぶるふるえながら思いきって答えた。
「俺、おとっさんを迎えに行くんだよ。」と、
「えらいなア。」と、白髭のおじいさんがほめてくれたためか、こわさもちょっとうすらいだ。
そして「親は？　兄弟は？」などいろいろきかれて少し仲よしになった気持ち、そのうちに
「坊や、こっちへこい。」といって、栄太の顔を、「むーっ」と見つめて
「坊やは、二十五までしか生きれんぞ。」「しかしなア、親を大事に、みんな仲よくして、神様や仏様におまいりして、よい人になったら、もっと生きられるかもしれん。」といった。子どもの栄太には二十五といわれても、何とも感じなかった。
　それから、竹鼻の佛佐吉さんのことをいろいろ話してくれた。
先程までのこわさもなくなり、仲よしになって話をきいているうちに松林もすぎ常貞寺前まで来た。
あたりはすっかり暗くなり、前渡の家々のランプのあかりが、あちこちに見える。
前方から荷車の音がきこえて来た。
　栄太は「おとっさーん。」と、力いっぱい叫びながらとんで行った。
そして、この白髭のおじいさんのことを話そう、とあたりを探したが、その姿は消えてなくなり、どこにもみえなかった。全く不思議なことである。
栄太は、力いっぱい阿呆綱をひきながら、さきほどまでのことを、おとっさんに話しながら歩いたせ

いか、帰り道は近かった。おとっさんは
「よかった、よかった。」とよろこんでくれた。
家につくと、おとっさんと一しょに風呂にはいり、みんなに、大男の白髭じいさんのことを話すとばあさんが「そりゃ、きっと松本の白髭神社の神様だろう、お前が親のいいつけを素直に守ったから、連れていってくださったのだ、よかったなア。」というとみんなも「そうだ、そうだ。」とうなづき疲れを忘れてとても明るくにぎやかな夕飯であった。
栄太は、その後すくすくと成長して、二十五才もいつのまにかすぎ、子宝にめぐまれ、幸福な人生を送り、八十何才とかで亡くなったということである。

大安寺の水

昔、ずっと昔、たいへん偉い坊さんがいて、修業のためか、八木山に登り、岩の上に座禅を組み一心にお祈りをしておられた。すると、「お坊さん、お坊さんどうかお助けください。」というのでお坊さんが目を開きよく見ると、まことにきれいな娘さんです。
こんな高い山に一人でよくも来たものと思い、よくよく見ると、けがをしてか血を流している。お坊さんが、「何事か。」とたずねると、「おがせに住む者でございます。どうかお助けください

そのかわりにあなたの処へお礼にお水を差し上げます。どんな日照りが続いてもきらさぬよう、この山より、お水を差し上げます。」と言うので坊さんは、ふしぎに思い、これは何かあるな、どうもおかしい。しばらく見つめていて、「うん、お前はただの娘ではなかろう、本性を現わせ。」と大声で言うと、この娘は一変大蛇となって、座禅岩を三回半も巻き頭をさげております。これを見た坊さんは「よし、早く行け。」と、これを聞いた大蛇はするすると、山より降りておがせの方へ行きました。

大蛇の去った後、坊さんは岩よりおり、帰る道中、いつも通っているのに、今日はふしぎにも、谷間に水の音がするので、近寄って見ると、岩の間より、こんこんと水が流れ出ているではありませんか。「あっ、これはありがたいことじゃ。さて、どうして寺まで引いて行くことができるか。」と、あれこれ考えをめぐらせているうち、「ああ、そうじゃ、竹を半分に割ってつなぎ合せればよかろう。」と思いつき、さっそく用意して、山道を何本も何本も竹をつなぎ合わせて、寺まで引いて行きました。

水はどんどん流れて来るようになり、いくら使っても切れることなく流れて来ます。

ある年、日照りが何日も何日もつづいて、村では田植えもできないこともあったけれども、大安寺の水は、この日照りがつづいてもすこしも変ることなく流れて来ました。現在も変ることなく流れて来ています。この大安寺には井戸というものは一つもありません。

竹の樋は、長く続いていましたが、現在は、土管、ビニールパイプ、などに変っております。

裏山には寺を守る防火水槽を作り、非常の場合の用水としています。
お坊さんの名は、笑堂和尚さんといわれた。

雷の手

各務原市那加新加納の少林寺に、いつ頃はじまったのか、真向様のお開帳といって、とってもにぎやかなおまつりがあったよ。新加納にまだ電車も汽車もなかった頃は、一里塚があった。ハタゴ、料理屋、十六銀行、郵便局もあり、中仙道の両側は家が立ち並び、西から東へ長い脇本陣とかいって、ちょっとした宿場やったが、ちょっと奥へ入ると、竹やぶや林が多くあり、家はパラパラあって、大正の時代になっても、三年毎ぐらいに二十日か一ケ月ほど開かれるお開帳を唯一の楽しみにしていたよ。何里もはなれた遠い所からもあるいて弁当持って、お参りにやって来る。お寺の参道の両側は昼でも暗い林や竹やぶを切って、見世物小屋や、露天の店が立ちならんでいた。一軒に二枚ぐらいづつ、ただ札をもらった。わっち達子どもは木の札を腰にぶらさげてもらって、友達と、今日はサーカス見ようか、あしたは、ノゾキ（入口で長い竹なんかで、ピシャン、ピシャン、とたたく）を見ようか、次の日はロクロク首という美しい娘の首がズルズルーとのびるのを見ようかと、勉強そっちのけで遊ぶにいそがしかったんだよ。門を入ると「おちょうず水はこなたでござる。お

手をきよめて御参詣なされ。」といって、五厘か一銭出して手に水をかけてくれる世話係の人の呼び声に心もうきうきお参りしたものだよ。そのとき必らず本堂の裏に廻ると台の上に白い布をしいて、雷の手があった。おおぜいの人の間からそっとのぞくと、うすぐろくて毛でもはえているのか、枯木のような気味の悪い骨があり、そこで説明をきいたか、きかないか、おぼえもないが、とにかくこわごわ見たのをおぼえている。

これも直接、少林寺の川村弘道住職に聞いたが、次のとおり、この雷獣の手（サルの手のような、手のひらにも手が生えている）のお話は寛文十一年とか、朝早くから蒸暑くて、きょうはゆうだつつあまが鳴らへんかと、みんな心配していると、案の定、午後から雲が出はじめ、みるみる天は墨を流したようにまっくらになり、一地うなりのするような雷が鳴って、新加納の東の方の雨宮の地に落ったんだよ。その雷は倒れた石燈籠の下敷きとなり、手をちぎられたまま天へ上って行ったんやと。そのときの少林寺住職体道大和尚が、その手を拾って帰り、ねんごろにお経さんをよんでいたんだと。そしたら、あくる年、同じ日に時刻も違わず晴れた日に、ガラガラッと一声して親子の雷が降りてきて、体道和尚に「神といわれ日々御誦経の徳により、天にカンカ雷神、カンカラ雷神の神名を得たるを喜び、報恩感謝のため、今ここに天降ったのである。この上は大和尚の結縁のまします方はどこの国の果までも、雷の災害を除きましょう。さればその目印には、われわれ二人の名を記して、戸口に貼りおきください。」と言い終ると、ガラガラッというやいなや、昇天したと云われ、その後この手を一度おがんだものは勿論、この寺のお守りを持っているものは、雷の災害を

うけることがないと云われているよ。

垂井の南宮さんにも雷神さんというのがあるそうな。南宮さんの宮司さんが「そんなに粗末にしておいてはいかんから、一度巻き物を持って来い。ねんごろに供養しないかん。」と云われたから下の赤いふさを新しいのと変えて持って行ったことがあると……。そして帰って手厚く供養したら、一天にわかに、かきくもり 雷がなり、どしゃぶりになったそうな。

現在は少林寺の秘物として拝むことはできないが、この新加納に電車のひけた年に開かれたお祭りを境に、このにぎやかな行事もなくなったよ。あれから五十年余り、一度もこの雷様の手にお目にかかったことはないが、何かあの頃を知るワッチ達にとって、何だかさみしい気がする。

お地蔵様

那加新加納の瑞眼寺の境内の一隅にまた新しく安置された先見の明あるお地蔵様で、十六面ある。今のお庫裏様の京都の生家の裏にお祭りしてあったものです。昭和七年頃、そのお父様が団体旅行で伊勢参りに行く朝、ふと裏を見ると、お地蔵様の首が落ちていたから、何か変ったことがあるといけないからと、お参りを取りやめられた。お昼ごろ、道一つへだてたお風呂やから火が出て、風呂やは丸焼けになったそうです。

お父様、お母様は信心家で、お不動様もお祭りしていられるから、お地蔵様を供養代をつけて、どこかへあずけようと思われて、それにはお寺へ行っている娘の所がよかろうと云うことで、五年ぐらい前（昭和四十八年頃）こちらへうつられて、現在お祭りしてあります。毎年八月二十八日が命日で、多くの方がお参りされます。

家宝の鏡

私の住んでいる中仙道沿いには、沢山の古墳や史跡があります。東の方には金縄塚、一里塚、芭蕉句碑など、少し南に下って狸塚、西の方には衣裳塚、坊の塚など昔を偲ぶ史跡指定の古墳が群居しています。

それらの史跡の一つ衣裳塚のほとりに、ある精農家が住んでいました。その夫婦に神のさずかり子か、ほんとうに可愛い利巧な女の子がいました。農に精出すかたわら、蝶よ花よと眼に入れてもいたくないほどに、可愛いがって育ていつくしんでいました。ところがその女の子が、三才の頃ふとしたことから眼病にかゝりました。両親は心配のあまり、文字通り東奔西走して、名医をたずね廻りましたが、なかなか快方には向かいませんでした。

その有様を見るにみかねた、近所の弘法様の堂守の爺さんが、もみ手をしながら或る日「こんな

こと言って良いやら悪いやらわからんが、気を悪くせんで聞いてくだされや。」と恐る恐る言うには「もしや何かのたたりじゃないじゃろか。一度八卦見にでも見てもらったら。」と申し出ました。

そう言われてみれば、唯さえ途方にくれている親子は「悪いことや人に恨まれるようなことは、何一つ身におぼえはないが、自分の何事にも至らなかった行ないにお詫びをしなけりゃ。」と親子三人が、旅じたくもそこそこに、木曽川の渡しをわたって、尾張の八卦見の家を訪ずれました。

一部始終を聞いた八卦見は「では聞くが、お前の家に先祖伝来の家宝が有るはずじゃ。それを今だかって供養したおぼえがあるか。」と大声でどなるように言いました。そして「それがたたりじゃ、たたりじゃ。」とつぶやきました。

親子三人は両手をついてじっとひれ伏していましたが、そのとき父親が、がばっとはね起きて「あの鏡じゃ、あの鏡じゃ。」と狂気のように叫びました。

あの鏡というのは衣裳塚のすぐ隣りに、一輪山古墳といって、直径九メートル余りの円墳がありましたが、何代か前の先祖がその塚を開墾したとき、出土したのがこの鏡だそうです。

「早く気がついてよかった。よかった。」と親子は飛ぶようにして家に帰り、一族即党を集め、ねんごろに供養を営みました。勿論、娘の眼病は薄紙をはぐように、日に日に全快いたしました。今では立派にむこ養子を迎え、夫婦円満にますます農にはげみ富み栄えています。めでたしめでたし。

次にその鏡について今少し付記させていただきます。この鏡は三角縁波文帯四神二獣鏡といって

直径二十一・九センチメートルで、四人の神の顔がくっきりと浮き彫りになっており、日本国内では、この鏡と同一のものはどこからも発見されていないそうです。この道の権威者梢崎彰一氏は、この鏡を魏鏡といわれ、三世紀後半大陸の魏の国、即ち今の中国でつくられたことになり、海を渡って運ばれてきたものだそうです。その決め手にはそうした模様があることを理由とされています。二十世紀になろうとしている現代、高松古墳、登呂遺跡などの発掘を見るにつけ、この珍らしいこの由来ある鏡とともに、高貴の人の威徳が偲ばれます。そして門外不出のこの鏡も、昭和の御代になって京都の美術館に展示されたり、近くは四十八年に中国大使が、鵜飼見物に来岐されたとき、その家の当主は県庁さしまわしの車にのって家宝の鏡をしっかりと抱いて伺候されたそうです。

餅つきの由来

今年も歳の瀬が近づいて、餅つきの時期になりました。都会のことはあまり分りませんが、地方によっては、いろいろむずかしいしきたりがあります。煤払いをすませてから、餅はつくものだとか、二十九日に餅をつくと、苦餅だからいけないなどと、お歳寄りのある家では、それに従って餅つきをおこなってきたものです。ところが、私の町内に、いつの頃からか暮の二十八日には、決して餅をつかないという習慣が今なお残っています。それにはこういう訳があるからです。

部落の古老のお話によりますと、なんでも明治維新前のことだそうですが、歳の瀬の二十八日に餅をついた町内の若者たちが、その余勢をかって、少し離れた金縄塚に宝探しに出かけました。何が出土したかはっきりしませんが、その発掘の作業中、にわかに自分の町内に火の手があがり、大騒ぎになりました。みるみるうちに町内は、猛火に包まれてしまい、東の方は大安寺川でようやく火がとまり、西の方は町内の大きな「もうちの木」によって、火の手を防ぐことができたといいます。中仙道筋の一町内の両側が、ほとんど燃えてしまったほどの大火だったそうです。これこそ塚を荒らす者の天罰てきめんと申せましょう。

現在もそのときの大火を偲ばせるように、火の元近くに秋葉神社がまつってあり、道路改修前までは、大きな常夜燈が立派に立っていました。そして大火を証拠だてるように、屋敷を深く耕やすと木の燃え屑や墨のような黒土が今でも出てくるとお歳寄りは申されます。百何十年も前のいましめを今に守って、私の町内では二十八日には決して餅をつきません。

紅唐椿

大安寺の本堂の前に、古い椿の老木があります。見るからに痛々しいほどに幹というもののほとんどが空洞になって、わずかに片側だけ皮肌があるだけで、よくぞ生きていられるものだと、不思議に思うくらいです。そんな椿の木も、春には真紅な花が美事に咲き、下に散り、敷く花は、ちょうど血のしたたりのように、あまりの紅さに一種異様に感じられるほどです。ほんとに踏むには惜しいこの見事な花も、誰一人として拾う者もありません。

この椿の木には次のようないわれがあるからです。現代の葬儀はどこまでいっても、殆んど内葬になりまして家で儀式がすめば、そのまま火葬場に向かいますが、戦前は必ずしもそうではなかったようです。その当時は長い葬列が柩をかつぎ、白旗をなびかせながら、静々と寺まで行き本堂で一斉の式を終ります。やがて柩をかついだ親族が、会葬者の合掌する中を、僧とともに「チンポンジャラン」と葬楽を奏しながら、この椿の木の下をしめやかに、三回輪を描きながら廻ります。喪主から野礼がありますと、その頃は土葬でしたので、すぐ墓地に向かいました。

それからは大きな葬儀のない限りこうした風習もなくなり、悲しい真紅な椿の木にまつわるお話も、自然に忘れられてしまうことでしょう。葬儀にはなくてはならぬ、悲しい運命の椿の木のお話

でした。

延命地蔵観世音

金幣大社那加手力雄神社の南、百米行きました所に、東西に走る道路があります。その道を、少し西へ行きました道路際の門前に、真新しい地蔵様が祭ってあります。

この地蔵様は、現戸主儀作さんの、先々代の太助さんが、安政二年七月二十四日にお堂を完成されて、その日に開眼供養されましたとか。

太助さんは、大変信心深い人で、先祖の菩提を弔らうためといって、西国三十三番の巡拝を、思い立たれました。同行の、山後の遠藤勇エ門さん、飛鳥の広瀬喜右エ門さんと、正月二十日に、旅立たれて、三月三日のお節句に帰りなさいました。三十三ケ寺をお参りになって、どのお寺でも、お砂を少しづついただいて持ち帰って、その砂を地下に埋めて、その上にお堂を建てなさいました。

その堂は、明治二十四年の濃尾の大震災に逢って、お堂が傾き、破損したそうで修理されました。けれどもその後、年々老化しましたので、現儀作さんが昭和五十年八月二十四日再建新築されました。長塚の宮大工、浅野定さんによって竣工されました。

地下に霊場のお砂が埋めてあるというので、西国三十三番の巡拝はここでと、お参りする人やら、

願いごとを持ってお出での方々のお参りが多かったそうです。

先々代は、お供えをして、香をたいて、お参り下さる方々をみながら、きょうも、多ぜいのお参りがあったと、誰にも言うともなく満足そうで、早速自分もお参りになりましたとか。

祭日は、八月二十四日の うらぼんの日で、この日は近所の人や遠くの縁家から提灯を持ってお参り下さいます。

当家では、お供物をお分けして供養なさっています。

お供物は、いつとなく誰かしら野菜・果物・珍らしい物を供えて下さいます。朝早く日参りする人もあったということです。

山の子

秋の取入れが終りました頃、小学校へ行く男の子たちにとって、楽しい「山の子」というのがありました。

これは、山の神を男の子だけでお祭りする行事です。そのいわれは、昔、織田信長が稲葉城を攻めるとき、手力神社を大変に信仰し祈願なさった頃にさかのぼります。

境内には、今でも二代目の弓掛桜があり、その頃不毛の原野であった各務野で狩をなさったとか。

そして、領地、神輿、剣などを寄付されたということです。その土地は、石山から北へ百八十町歩、今の尾崎団地の辺まで、東は各務原百八十町歩でした。その土地を、那加の旧部落、長塚・新加納・岩地・山後・西市場・桐野・前洞・野畑に分配され、長塚の分け分は、桐野の奥の、うばのふところ辺だったそうです。その分け分の山を今年は落葉かきだけ、今年は伐採とかで山を守ってきました。その山の神を小学校までの男の子だけが祭るお祭です。

秋の取入れが終りますと、山の子の話がもちあがります。前日から藁やお米の志、男子出生の家は多めの寄付をして頂き、年長さんの家を宿にして、買物や準備に忙がしいです。何しろ、大人の手を借りず、収支決算からぼた餅作りまで、全部子供たちでするのですから。

当日は夕方藁で舟形を作り、両端に紐をつけた中へ、「ぼた餅三個、さんま一匹」を入れて、肩にかけマスクをかけた人を先頭に、次には榊を持った人、その次は小さい子から順々に、大きい子と、手には各自にたい松を持って、「やんこやんこ、山の子のぼた餅は、大きなぼた餅で、いくつ食った六つ食った、六つ腹やんで死によった、さんやほーい、さんやほーい」

と繰り返し、繰り返し、歌いながら山の神まで、長い行列が続きます。

舟形に入れた、供物をそのまま山の神にかける。お祓いをする。たい松の火で、盛ってある藁に火を入れて燃え終るのを待って帰ります。

浜の輪になって、ぼた餅を食べます。大きなぼた餅おいしいな、お替りあるよ、いくつ食べる、などと皆ににこにこ顔です。

山の神は、はじめは今の那加農協の倉庫の辺にまつってあり、左義長も、ここで行われていたそうですが、家が建つようになって、火災予防ということもあって、少し南の長池に移り、その後、村上神社に移って、現在北側の小高い所に安置してあります。左義長もこゝで今も行っています。

この山の子も戦後の混乱で、いつの間にか行われなくなりました。そして、何年かたって、三十八年、那加・稲羽・蘇原・鵜沼の四ケ町村合併になり、分け分もなくなりました。

けれども、今も尚、山の神のお祭りをしている所もあるそうです。

前渡の辨天様

前渡の不動様のそばに弁天様のお社があるそうです。村の学校に行く男の子が二人いました。その中の一人の子が、そのお社の池に鯉が飼ってありましたのを家に持ち帰り、自分の池に入れておきました。

しばらくしてある日のこと、鯉をとらえて帰った子どもが急に動けなくなってしまいました。それで大騒ぎとなり、皆が弁天様のバチがあたったのやといって心配しておりました。そして、その子どもの家の鯉もみんな死んでしまったそうです。村の人達は一生懸命におわびをしたそうです。

それから、村の人達はそのお社をいつもいつもきれいにするようになったということです。

三井神社と竜神様との争い

むかし、三井山のまわりはずっと海であったそうです。その頃、フカ（海のフカ）の群があばれまわっておりました。その山の上には、水の神様が住んでおられ、お祭りしてありました。その神様に、お仕えしておった女の人がおりました。ある時フカと云い争った末、とうとうフカの念力に引きよせられて崖から落されて食べられてしまいました。フカは、その肉があまりにもおいしかったので、人身お供えを所望いたしました。そのため時々、女の人がのみこまれておりました。

時代が変わり埋め立てられて海が遠くなりました。それでフカの住んでいた所が大きな池になってしまいました。

その池に竜が住んでいて、フカのたましいが竜に取りついてしまいました。それで三井神社は池の主の竜神様とは仲たがいをしてしまったそうです。

山の上にお城ができたので、三井神社がほかにうつされ、それからでも、ふらっと通る人を見そめては池に落としこんで食べておったそうで、だれいうとなく自殺の名所になってしまい、また心中があると、いつも男は浮かび上って女だけは必らず沈んでしまったそうです。今でも竜神様に祈願をかけると気がふれるといいつたえられております。

ハオカ山の盗賊

阿原のお稲荷様のおまつりしてある前の不動ケ丘という小山は、昔、ハオカ山と皆んなで呼んでいて、子ども達の山のぼりやあそび場になっていました。

大昔、この山に盗賊が立てこもって住んでいました。

山の前の街道を通る多くの旅人たちを物色してお金を持っていそうな人や上等の着物を着た人や美しい娘さんなど、とにかく、これはものになりそうなと思うと、山から一気にかけおりて来てはお金も着物も全部ひったくっては、山に逃げこみこもったそうです。

旅びとたちは、その道を通るのがいやで、さけて行きたくてもどうしても通らなければ行けないので困っていました。

そのうちにだんだんご時勢も変わってやかましくなったので、おることができる場所をどこかにうつして、すがたをくらましたと伝えられています。

ハオカ山とは盗賊どもが、「ハゴカ、オコカ」といっていたので、自然にハオカ山と呼んだといい伝えられております。

狐火

岐阜の北にあたるところに、新屋敷という村があった。

雨の降りそうな暗い晩や、しとしとと雨の夜など、「また、もうじき狐が火をともすぞ。」と、おばあさんが言うと、きまったように大きい火が堤防の上に提灯のようにちょんとつくと、「とんとん」と十個ぐらいはすに並んで、歩くように、へったりふえたりしておもしろくおどるように見えた。

「あ……、狐が火をともした、ともした。」と子ども達はさわいだもんだ。おひるにその堤防に行って見ると、なんにもない。ただ草のはえたぼうぼうとした堤であった。

「また今夜ごろ火をつけるぞ。」と言うときっと行列が始まる。いつもその堤の所しか火がつかなかったことをおぼえている。今はもうその堤防も何もありません。町になってしまってきつねはどこへいったのやら……

今も時々思い出して孫達にも話し、昔の民話的な風景がなつかしい。そして、それをほんとうに信じていたころのことがなつかしい。

白鷺の湯の由来

私が五十年も若かりしころに、弟が教職のため下呂の学校にいたころ、土地の古くから住む人達にちょっと聞いたことを思い出しましたので書いてみました。

大昔には湯が湧き出ていたのに、それを遠い昔のようにだれもかも忘れておったんやと。するとある時、一羽の白鷺が水たまりに来て、動かずに立って足をつけていたことがあったんや。それを見たお百姓が、「おかしいぞ。変じゃのう。何をやっとるんやろ。何で動かんのやろ。」と、思って行って見ると、何と水と思ったのに湯が湧き出ていたんや。

びっくりこいたお百姓は、白鷺の後をとことことぼっていったが、知らんうちにどっこにもおらんようになってしまった。

もうもどろうとしたら、そこにあった大杉の根本に、小さな薬師様が立ってござった。鷺はきっと足にけがをしていたんやろう。

鷺が、足のけがを湧き出る湯につかってなおしていたので、これはきっと薬湯であるというおつげだと、土地の人んたが話して大騒動になり、白い鷺が足を直していた薬湯やで、白鷺の湯と云う名前をつけたんやと。今でも白鷺の湯という温泉があるそうじゃ。そして、薬師如来様をお祀りし

たお社もあるんやと。

丸太が石になった話

むかし、ある山国に名高いお坊さんが訪れて来ました。そして、この山深い山村が大へん気に入りました。ここに立派なお寺を建てたいと思い村人に相談をしたところ、村人も喜んでそのお坊さんに協力をしてお寺を建てることになりました。

ところがこの村に、それはそれはヘソ曲りな天邪鬼の男がいて、「なんだ、よそ者にそんな勝手なまねをされては面白くない。ひとつ意地悪をして、お寺を建てられなくしてやろう。」と考え、お坊さん始め村人が、斉戒沐浴し山から木を切り出し、たくさんの柱を作りはじめた丸太に、小便をかけてやろうと思いついたのです。そのことを伝え聞いたお坊さんは、村人と相談して交替で夜廻りをすることにしました。いく日もかかってようやく五～六十本の丸太ができあがりました。

その最後の夜廻りがお坊さんの番になりました。そして明け方ヤレヤレ無事にできたわとホットしたせいか、不覚にもついうとうととしてしまいました。あわてて目をさまして見ると、どうでしょう。せっかく多勢の人が苦心して作った丸太が、全部小便をかけられて、きたないしみだらけになっているではありませんか。人々は、がっかりしてお坊さんもとうとうお寺を建てることを断念

してしまったそうです。

そしてそれきりお坊さんの姿はこの村から消えてしまいました。すると、どうでしょう。不思議なことがおこりました。丸太を積んだ地面の下からほかほかと暖かになり、段々とあつくなって、丸太がそのまま石になってしまったそうです。

今もその丸太の石がその地方の史蹟として残っているということです。

おくりキツネ

今から六十年も前のこと、私のおじいさんから聞いた話です。農家のため毎日毎日畑に出かけます。それが仕事で、その畑に行くには二つの堤を通らねば行けません。

また長良川の支流で一本橋がかけてあり、その橋を渡って川原を通って行くのです。

日も短い夕暮れのこと、おそくなったので急いで橋のそばにくると、前の方に娘さんが灯をつけて、チョロチョロ行くので、不思議に思っておじさんが声をかけて、「もしもし娘さん。こんなにおそくまでどこにいってきたのかな。うちではお父さんやお母さんが心配しておんさるやろうで気をつけて早く帰りんさいな。あんまり見たことのない娘さんやがどこの娘さんかな。」とそんなことを言いながら渡り終ったときに「ふと」灯が消えてしまったので、びっくりして立ち止まってあ

たりを見ると、白い歯を出して「コン、コン」と泣きながら逃げて行ってしまった。あれがみんなの人がいっていたおくりキツネというのじゃったと。それからは早く帰るようになったということでした。

瑞眼寺のお稲荷様

各務原市那加新加納の北の端（現在浜見町で家が百五十軒程あり、昔のおもかげは全然ありません）　昔は浜見塚とか、洞築とかいっていたじぶん、私の生まれた明治の終り、育った大正の初めころは隣りといっても、畑や竹やぶ、林などでさえぎられ、家が四軒あっただけで、その中の一軒が瑞眼寺という禅寺で、今から四代位前の桂輪先師和尚が亡くなられたのは、明治十三年十月七日と碑に書いてあります。

その住職の前は尼さんだったとか。そのじぶんに、そのお寺の近くには、年とったきつねが何匹もいて、お寺の西側に小さなほこらがあって、いつも開け放してあり、自由に出入りできるようにしてあったとか。それも年を経るにしたがい、代がかわり忘れられたようになっていたのを、私の父が昔の話をして、お祭りした方がよいといったから、二十年程前の昭和三十三年頃に先住職が上加納のお稲荷様にお尋ねになったら入る所がなくて、屋敷内をうろうろして見えるから、お祭りし

なけりゃいかん、といわれてたそうです。そこで、京都の伏見稲荷にもうで、武丸大神様をいただき帰られて、今は東側にお祭りしてあります。何不自由なく暮らせるのもそのお陰ですといわれました。

昔は浜見塚というくらいで塚がお寺の裏やら近くにいくつもあったらしいが、だんだんなくなって、今は小さくなって一つあるだけですが、一年に一・二度市役所から写真をとりにきて、教材だからなぶらないようにしてくださいといって行かれるそうです。

勝さのこと

勝さは若いころ、家族が多くて、口べらしのために本家へ百姓男として住みこんだ。百姓小屋の片隅の床を張った四畳半に寝起きして、雨の日は米つき、藁細工、お天気の時は早くから外へ出て朝飯前に一仕事すます真面目で人の好い働き者であった。

おゆうさは本家の幼ない子で、この百姓小屋へよく遊びに来る。勝さは藁を打ち縄をない草履やわらじを作りながらよく歌ってやる。

「寺は小金井の吉祥寺、御書見なされる後よりバタン、バタン。」

それは勝さが岐阜へお彼岸詣りに行った時、「のぞき」を見てきいた片言覚えの文句らしい。

何が何して何とやら、「あっついワイナ吉三さん、寒いワイナ吉三さん。」など勝手につくって聞かせる。これを聞きながら、おゆうさは眠ってしまうこともある。

その後、勝さは本家から少しの土地と畑をもらって家を建て、自分の力で暮らしていくようになった。こんにゃくを入れた桶を前後に天ぴん棒でかつぎ売り歩くようになった。勝さのこんにゃくは、手でちぎってたまりをつけて食べるとうまい。と待っている家も多かった。人のいい勝さは子供にも親しまれからかわれて、ちょっとした名物男になった。

こんにゃく売りの帰りには、道ばたの木片や、縄くずを拾い集めて、風呂焚きや肥料にする。この商いの間には、井戸掘、井戸がえは勝さの得意とするところである。綿の厚い布子半てんに縄帯、太い麻縄、くさみ、じょりん、など一通りそろえて、遠い所でも出かける。井戸掘は、勝さに限ると重宝がられて、働くこととからだを使うことが生きがいである。

勝さは正直で、多勢の子どもや孫やまわりの人達に親しまれて長生きされたときいた。と那加の里の名物男の一こま、おゆうさのいとこさんは思い出話を結ばれた。

石臼を引く歌

「ヒデや、お利口じゃから臼引きを手伝えや。届かないから台を持ってきてなん。」「またか。」
「またと言うやつがあるかよ。おっかぁの小さい時にはなん、貧乏人の女の子はみんな子守りに行ったんじゃ。子どもが寝ているときは、臼引きも手伝ってこんな歌を歌ったぞよ。」
「子守どうじゃこうじゃ、出変りやきたあが、ここにおる気か、ナックリコ、おらん気か。」
「ドンド」
「ここにおる気は少しもないが、この子可愛いさ、ナックリコ、また一期」「ドンド」
「ああ、おもたかった。姉はちょっとも手伝わへんに。」
「何を言っちょる。あんねは弟の守しちょるぞ。さあさあ粉が引けたでなん。湯を沸いちょけよ。」
「ちゃっと、ぼちを作るからなん。」
「おっかあ、おっとうが帰ってきたよ。」「そうかよ。やれやれぼちも蒸せたぞ。」
「おっかあ、めし食えるかよ。」
「ふん、おっとう。今日はなも、ヒデが臼引きを手伝ってくれたからぼちをたんと食いんさいよ。」
「そうかよ。そりゃあよかった。今日はなん、仕事をたんとやったで腹がへっちょるでなん。」

「どれどれ一つ食おうか。こりゃうまい。あしたの朝はなん、中まで狐こげに焼いちょけよ。」
父の髭面顔でぼちを食べる姿、歌いながら母と臼を引いた思い出。ありありと脳裏に浮んだ。

おならと太平

話しずきのおとっさんは、いつも藁細工をやりながら子どもを集めてよく面白い話をしてくれた。
「おいらの子どものころにはなん、隣り村に大へん上手にヘイをこく人がいてなん、その人は太平さと言ったとさ。」
子どもが多勢集まって来て、「太平さ、今日はヘイのぐあいはどうかなん。」
「うん、このあいだは失敗したでのう。今日は夕べ芋をたんと食ったでよいと思うがのう。」
「一つやってみようかよ。　どれどれ七段ばしごとゆこう。」
太平さは、にやにや笑いながら体を構えて、「ぶう、ぶう、ぶう、ぶう、ぶう、ぶう、ぶう。」
「はしごが崩れるから両方に止を打って。」「ぴい、ぴい、ぴい、ぴい、ぴい、ぴい、ぴい。」
「ぴい、ぴい、ぴい、ぴい、ぴい、ぴい、ぴい。」「こんどは、はしごに上るとござい。」「ぶう、ぶう、ぶう、ぶう、ぶう、ぶう。一番上は大きいぞ。ぶぶーん。」
「やれやれどうにか上ったでなん。こんどは下へ降りよかのう。」「ぶう、ぶう、ぶう、ぶう、ぶう、

ぷう、ぷぷーん。」

「今日はどうにかできたで、わしの面目もたったわい。」「太平さ、今度もやってくんろ。」「よしよし、今度は九段はしごをやったろ。」

太平さは、すました顔でとことこ帰って行ったとさ。

小佐野巴馬頭観音の由来

昔々、といっても徳川中期の頃、世の中が落ちついて泰平になると、すべてが派手になりお祭りも立派になって、十月十五日の神明神社の余興にかけ馬という行事が時折行われるようになった。

それは馬の背中に五色の布で飾り、鈴をのせて馬だけ走らせることで神社の裏で、辻から如来橋まで約八〇〇米の間を両側に棚を結って、走らせたのでありました。

付近一帯はぞう木林で一軒も家のなかった時代であります。

ところが三〇〇メートルの四つ辻まで行くと速力がおちたり、馬が怪我をしたりして事故が続出した年があった。それで巴の古老たちが牛馬安全の馬頭観音様をおまつりしたらというので、その辻のかたわらに安置したのです。

それは安政五年午二月のことです。

その当時は露座仏で、お堂はなかったが、徳川末期のころ簡単なお堂を建てて、村人たちも帰依してお詣りするようになりました。馬や牛の食欲のないとき、また小児のおこり（熱病）や、はしかやかぜくらいはおまいりすればよくなおりました。

粂車場（一メートル四方に柱を四本立てた屋型）も作って馬や牛の爪を切ったり、簡単な治療をしたりする場所もありました。

れいけんあらたかな観音様故、今も生き生きとした花が供えてあって、誰がおまいりするか線香のけむりがときどき立っています。

現在の御堂は昭和十四年に故岩井政信さんを始め数人の世話人が、村全体の浄財で再建したのです。

完成の際は僧侶を招いて入仏供養をし、餅まきもやった記憶があります。

芦原のお稲荷さま

那加の前洞の東南で、雄飛が丘町から北へ蘇原の大島へいく途中、放水路をこえて一〇〇メートル程の右がわに小さいほこらがある。

まわりはずっと畑が続いて歩く人影もあまり見られない静かな田園地帯、ここが芦原である。

ほこらはお稲荷様。赤い鳥居は五十坪程の一郭に南向きに立っている。西北は三峰山、西の方は境川の放水路のかなた、前野の地まで目をさえぎるものはない。南の官林山には古墳も残されているときく。この芦原のお稲荷さまは、のどの神様で信じて参る人は声もよくなり、のどの病も治ると伝えられている。

昔、むかし、二百年も前にはこの芦原には二～三十軒の住家があり百姓のかたわら川魚をあきなう人の多い部落であった。

中に一きわ目立つ立派な医者どののお屋敷があった。まわりにおほりをめぐらし、門番のいるお庭うちにはお稲荷さまがまつってある。

お稲荷さまを拝んでは病人をみる医者どのの名は遠くまできこえて大変な繁盛ぶりだった。ことにのどの治療は上手で、高い熱で食べ物も通らぬ病人も、ただ一回でなおすという評判もよく名医の名も高くなってきた。

この医者どのの療治法の一つに手をもみ上げて血のめぐりをよくし、親指の爪のもとへはじき針をさし、悪血をしぼり出すようにする しゃ血療法とかがあった。（この技を覚えて五十年程前までは、はじき針を使って人を助けたおばあさんが長塚にあったそうだけど今はきかない。）

そしてある夏、はげしい夕立と恐ろしい雷なりの日、みな恐れて女や子どもは蚊帳の中で耳をおさえて早く雷の遠のくのを祈っているとき、医者どのはわざわざ縁がわに出て酒を飲み雷なりをさかなに酔にまかせて空にむかい「今一発所望」と叫ばれた。

途端に雷が落ちた。そしてうたれてこの医者どのはなくなられた。
雷は火事を起し家も屋敷も医者どのも一度になくなってしまった。
その後、屋敷は転々と所有主が変わり、また部落の人達もちりぢりになり、何人目かの所有主が土地をそのまま人に托して、焼け残ったお稲荷様の祠を守って名古屋に移り住まれた。
ある夜この人の夢枕にお稲荷さまが立たれて、「もとの屋敷にもどりたい。」と二晩も三晩もうったえられたので、その言葉をうけて名古屋から祠をもとの芦原の土地にもどされたのだそうだ。
今では二月の初午の前日におまつりをしてお餅まきをし、お稲荷さまの霊をなぐさめる行事がある。
伝えきく人、昔をなつかしみおさいせんを上げる人、油揚を供える人。邪魔をする人もないこの鳥居の前で大声で歌う人、また夏の木影に道行く人がひとときの涼を求めてただずむ人もあり、親しみ深いこの芦原のお稲荷さまは、長く長くまつり続けられるでありましょう。

大杉物語

ある所に昔からいく代も続いた大きな酒屋がありました。それを証拠だてるように酒蔵の裏には、みかかえもあるようなもうちの木や、天までとどくような杉の大木が生い茂っていました。その下

には小路があり、それから先は大きな蓮田になっていました。

いつのころだったか私達がもの心つくころには「あの裏の木を切ると何かばちがあたるによって木を切るでないぞ。枝をおろすでないぞ。」と大人たちから伝え聞いていました。実際この目で何ひとつたたりも不思議なことも見たおぼえもありませんが、何か不気味な、いやな予感を秘めていました。そして木々たちはそんな人間どもの思惑など知らん顔に年々ますます大きく茂っていきました。

明治の御代はいざ知らず、大正はなんのことなく平和に過ぎました。そして昭和は終戦後のお話でございます。そのころから都会といわず田舎の隅々まで生活が一変して、田圃は埋めて家を建て畑はつぶしてアパートが建ち、山をこわして団地が並ぶというありさまに驚くばかりでした。今までの家族制度が一変に破壊されだれもがただ家、々、々と血まなこになっていました。そんな時、だれでもよく突飛なことを考えるものです。

ある日、隣りのじいさんが来て、「うちも裏の蓮田をあんなにしちょっても一文にもならんによって、蓮田を埋めて小銭かせぎに借家の五・六軒も建てようかと思っちょるが。」と話しかけました。「そりゃあ景気のよいことで。」と相槌を打ったまではまだよかったのでしたが、その後に恐ろしい言葉が待ちかまえていようとはだれも想像しませんでした。おじいさんは「ところで、あんたんとこの裏の木を切ってもらえんじゃろか。あの木を切らにゃあどうにもならんわい。」とどうも本気のようです。はたと困ったその家の主人は「困ったことになったわい。困った困った。」と心の中でつ

ぶやいて、しばらくじっと目をつぶっていましたが、ようやく気を沈め心をとりなおして「じいさんも知ってのとおり昔からあの木は切らぬことになっちょる。ましてわしの手では切れんのじゃ。」と吐き出すように言い切りました。そして二人ともしばらくの間じっと考え込んでしまいました。そして、やおら顔を上げたじいさんは、「おまえさまが切れなきゃわしが切る。それならいいじゃろ。」と言いました。でも、もしものことがあった時を考えると主人は心よい返事はかるがるとできませんでした。

自分のことばかりに心はやるじいさんには、他人の思惑など考えるひまなどありません。じいさんの思いどおり話はどんどんと前進して、とうとう全部木を切ることになりました。その時、その家の主人は毅然たる態度で申しました。「じいさんや、わしはあの木一本もいらん。全部切ったらおまえにやるからそのかわり後々のことは、よう責任もたぬがそれでよいじゃろな。そして今一つ頼みがある。これだけは必ず守っておくれよ。切る前にねんごろに御祈祷してから仕事にかかるんじゃ。」とくり返しくり返しさとしました。

鬼の首でも取ったかのような隣りのじいさんは、二、三日後にはもう多勢の人を雇って木を切りはじめました。大木の枝には烏・野鳩・ごい鷺などのねぐらもありましたが、みんなどこかへ散りじりに行ってしまいました。そして端から杉・樫・もうちの木と次々に切り払われて一番最後に木々の長老ともいうべき大杉一本だけになりました。小高い土堤の上にあるこの大杉は、自分一人の最後の生き残りを哀れむかのような悲そうな面持ちで、でも姿だけはどっしりと、あたりを圧するほ

どに威厳をもって立っていました。

次の日いよいよこの大杉にも最後の日がきました。すっかり枝葉を払われた丸裸の幹には、いく筋かのロープが巻かれ、多勢の人がこれをひっぱっていました。天地も裂けんばかりにめりめりという音響とともに、もんどりうって倒れました。そして幹はちょうどまりがはずむように一メートルもはずんだかと思うと、その下にどうしたことか、隣りのじいさんが吸い込まれるように下敷になってしまいました。一瞬の出来事にだれもがまっさおになり、足がすくんで動けませんでした。もちろん「てこ」ぐらいで動くような木ではありません。あえなくじいさんは亡くなってしまいました。

運が悪かったといえばそれまでですが、何か目に見えない不思議な糸にあやつられ、哀れな最後をとげたこのじいさんの運命を目のあたりにみて、いいようのない恐ろしさを感じました。昔からの言い伝えが、まさに的中したことになります。

今ではそんな物語りがあることすら知らぬ借家の人々は、楽しく明るく平和に毎日を暮しています。この文の終りにあたり、じいさんの冥福をお祈りいたします。

お稲荷様の白狐

昔、むかし、鵜沼の里を「うるま」といったころ、郵便屋さんのことを「ホイト」と言ったそうです。紺の股引きにわらじをはいて、綿入れの胴衣を着た威勢のいい男衆が郵便物を箱に入れて棒に差し、それを肩にかついで「ホイト、ホイト、ホイト」とかけ声勇ましく、中山道を走ったものだそうです。その時分の人は、「ホイト」のかけ声を聞くと、だれいうとなく「ああ、ホイトが通るからもう何時だ。」といったものだそうです。

それから何十年かたって、田舎に特定郵便局というものがあったころのお話です。普通の郵便物は昼間だけですが、電報ともなれば夜の夜中でも到着します。そうすれば、電報配達夫が届けなければなりません。電燈とて一戸に一燈くらいしかない当時、まっ暗な夜のこととて、だれしもいい気持ちのものではなかったようです。

そのころ「大石屋」といって、昔から富み栄えた石屋さんがありました。だれいうともなく「あの屋敷の近くで白狐が出た。白狐を見た。」という噂でもちきりでした。ある晩、夜中に電報を持った若者が、こわごわその屋敷のそばまで来ますと、あんのじょう白狐が南から北へ中山道を横切って、大石屋へ飛び込んだそうです。次の晩も近くの気丈な婆さんが、白狐をみとどけたと言いふらして歩きました。

そのころは山も近くにあることだから、飼兎や飼鶏が野狐に取られてくやしがったものです。野狐はたいてい茶色ときまっていたので、白狐を不思議に思っていたところ、その屋敷に土蔵と離れ座敷との間に「稲荷大明神」が祭ってあったそうです。近所の人たちは「お稲荷様は夜な夜などこ

へお出ましだろう。」などとうわさしていたやさき、それからしばらくたって、その家の人が朝起きてみると、土蔵の横に大きな白狐が死んでいるのを発見してびっくりしたそうです。さては、わが家のお稲荷様だったのかと懇ろに葬られたそうです。

けれどその後、大石屋はどうしたことか、にわかに家運が下火となり、どの商売も面白くなく転々と商売を変えられ、終りには大きな屋敷も人手に渡り、どこかへ引越して行かれたそうです。私たちもこの目で、大きな総瓦の母屋がいつまでも崩れるままにまかせてあったのをよく知っています。それはみんなむかしむかしのお話です。

行念寺の昔話

八代前の住職が隠居して、野口に庵を建てたのが行念寺の始まりである。

近くの人々は、住職の気やすさに集まって、信仰話を聞いたり、世間話をすることを楽しみにしていた。

この時代に、木曽川ぞいの下中屋で蓮如上人の教えをうけた人々は、行念庵の話を伝えきいて、農業のあい間をみて、下中屋から各務原の松林の細道を通って行念庵にやってきて、御仏前で念仏をとなえてから、お説教を聞いたり、世間話をすることを楽しみにしていた。

そして昼間には、世話人数名が五目飯をつくって
「くっちゃはれ、くっちゃはれ。」（食べてください）
と集まった人々にすすめていた。美味しい五目飯が食べられることも、楽しみの一つであった。
この時代の民衆は、お寺と密着していたそうであり、集まりは人々の命のふれ合いだから、集いによりお互いの命を尊び、仲よしのつきあいができた。この時代のお寺は、現代でいう公民館や集会所、福祉センターなどの代りをしていたようだ。
やがて、この下中屋から各務原の松林の間を縫って、行念寺に通う道は、誰いうとなく、行念寺街道と呼ばれるようになった。この街道は、春から秋にかけては一面の草原となって、時々道が分らなくなって迷うことがあった。その時は迷った所で腰をおろして休みながら仏様に祈っていた。そして半時もすると、仏様が現われて道案内をして行念寺に連れていってくださった。
持参の酒をのんで、いい気分になって眠った時は、二、三時間たってから仏様が現われて、お寺へは案内せず下中屋まで送ってくださった。
一般の人々は、「かまいたち」か「狐」にだまされて道に迷ったのだといい、酒をのんでよいつぶれたというのは、狐にだまされて泥水を飲まされたのだ。彼は、カマイタチや狐にだまされたのだといって、世間話の種にしたという。
上人は、カマイタチや狐は、人をだますような知恵はない。それは人間の心の問題だから、熱心なみ仏の教えをよくきいて、心を改めることが大切であると悟らされた。

下中屋付近の木曽川の沿岸は耕作のできそうな所がたくさんあった。その当時の本願寺八代目は火の消えたように淋しくなっていたので、これではいけないと下中屋付近に目をつけて、木曽川べりを開拓して、農民に開放したので、人々がついてきて再び栄えてきた。そして蓮如上人と下中屋の人々とが結ばれてお寺との密着ができた。

明治時代になっても、お寺と民衆は密着していた。農民開放運動家の栄三郎さんは、当時に農民を集めて、農民開放についての指導と懇談を時々していた。そして昼食時になると五目飯をふるまっていた。農民はそれを楽しみにして集まったという話も聞いている。また野口付近だけでなく、成清の森さんと協力して、岐東一円に農民開放運動をしていたという。

彼の主張の一説を次に紹介しよう。本来からいえば、この世に自分の物という物は何一つないのです。皆天地自然のつくり主のおかげで、我々は世に生かされているのです。造り主の目からご覧になれば、人類はみな同胞の兄弟です。その兄弟同志が欲望のために戦い、銭儲けとは天地の造り主の親からみたら、たまらないほど情けない。罪なやり方をしているのです。この世は人類の修業場でもあり、今まではいろいろの苦労もあったが、これからは天地の造り主の親からの導きがあるようになるから、今までのやり方に対する罪の認識を深く悟り、われわれ農民を生かしてくださる元の親につかえる方法に改めていく努力をしなければいけません。そうしなければ、人類は永遠に争って、真の幸福を得ることができませんと常に主張されていたようです。また、栄三郎さんは熱心に記録をとって、郷土史研究に力をそそいでいたとのことです。

農民開放運動は、農民のためのみならず、日本人のためだと主張し、日の当らない土台石のような暮らしぶりであったともいわれています。彼のこの意志を継ぐ子供がなくて、晩年になって鵜沼の字羽場から妹の子をもらい受けて後継者とした。この栄三郎さんが多年記録してきた民俗史は、現代の郷土研究家の手に渡って、目下研究されているのでやがて、蘇原郷土史に詳しく記載され出版されて、皆さんの目にふれる日も近いことであろう。

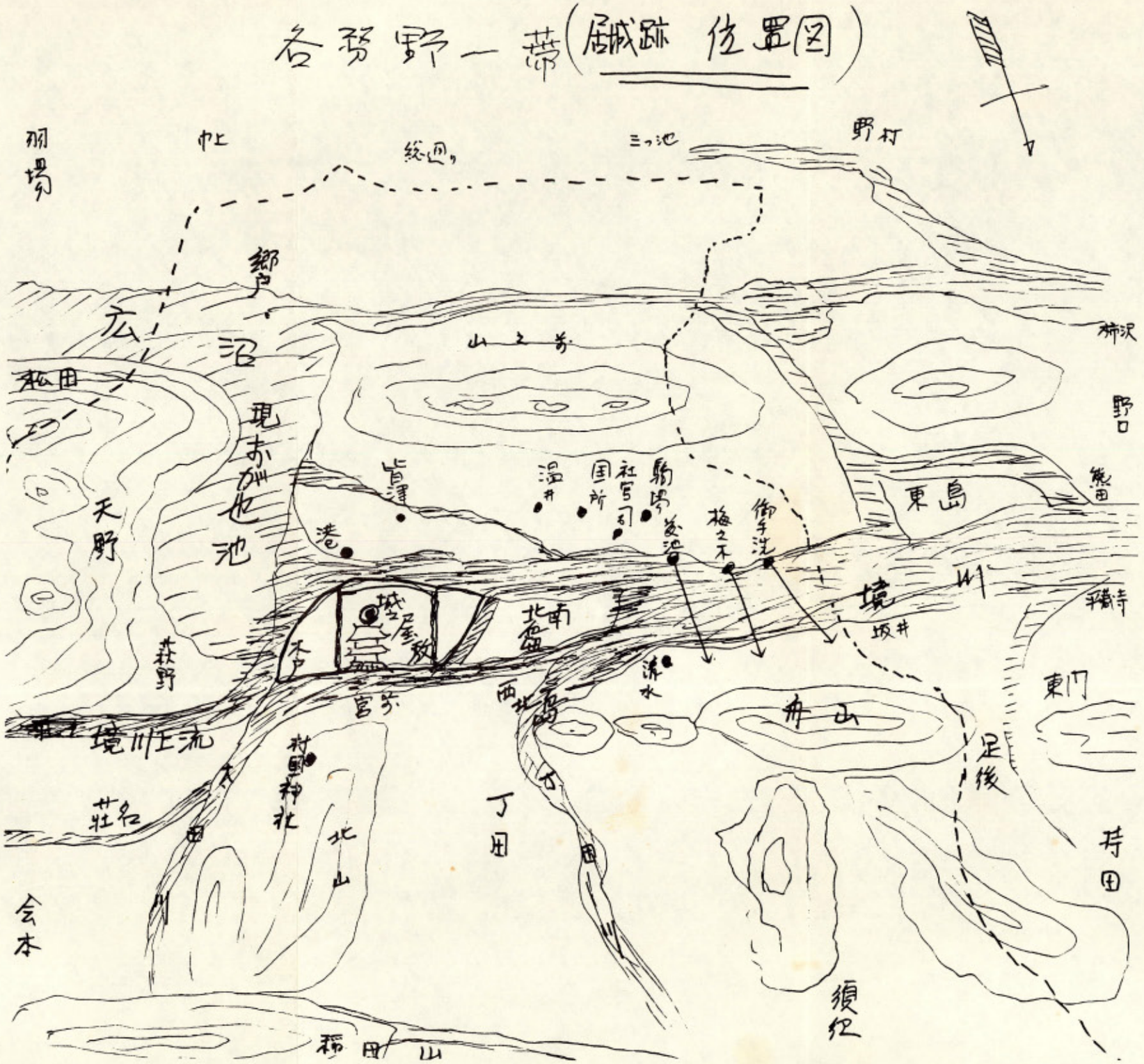
なお、これに関連したお話は、まだ沢山に残されているようですが、何分短時間の懇話のことと て沢山に掘りだせなかったことが残念に思います。

御野国各牟郡各務郷字城之屋敷今昔物語

大化の改新後、飛鳥時代美濃の国各牟郡、村国郷の豪族村国男依がこの地一帯を支配しており弘文元年壬申の乱がおこり、村国男依は大海人皇子に従い、一早く不破の関に出出兵し大勝利をもたらし、天武天皇の世となり男依はこの戦いの勲功により、丁田と優秀な兵を賜り、なお、かばね性連（もらじ）を授かって外紫位になり、朝廷に仕えることとなり天武四年、約千参百年前天命を全っとうしてこの世を去る。勲功により授かった優秀な兵の一人が各務氏の祖であり、村国氏の重臣として各務郷を守っており、その居城を現在の各務城の屋敷においたのであります。

その頃は、各務地内を流れる境川は、栄林寺の所により二又になり、皆津裏まで流れ、ここでおがせの沼から流れる川と一諸になり、小学校の方へ流れて国所裏を通り、境川と一諸になっていたものと思われます。当時の交通はすべて舟を使っていたと思います。各務氏の城は、（城というよりも大きな館と思う）現在では何も遺構はありませんが、数千年前までは、現在の長縄孝久氏宅に大きな石を使った井戸があります。長縄実氏宅には、土るいの跡が見られました。また、長縄定雄氏宅東には、内堀の跡と思われる堀のような所がありまして内堀の中、本丸の広さは約五千坪ぐらいと思われますが、これは、さだかではありません。外堀は前に記しました川を利用して、北側は長縄三郎氏宅裏を駐在所まで、流れる溝がそうでないかと思われます。こうしてみると、その居城地積は、駐在所から直線で南へ行き、農協スタンドまでとなり、そこから東へ後藤製材までと、北へ教副寺までとなり、さらにそこから西へ駐在所までと思います。そして、外敵の見張所として、天野山の頂上に望楼を構えて、見張りをしていたと感じられます。村国氏につかえた各務氏の名前を文献から見ると、各務勝小牧、同牧夫が、初めに出ていますが、村国氏が滅びてからは、各務氏が各務郡の大領となり、貞観二年には（平安時代）各務勝吉が全盛をきわめ、貞観八年に広野川事件がおこり、美濃と尾張の境界争いがおこり、各務氏が勝って現在の木曽川を境としたのでありまず。その後、康保二年に各務勝利宗、長徳三年各務勝宿弥隆成、長保元年に各務勝宿弥良近、鎌倉時代に入り、正治元年に各務宿弥宗基、建永三年に各務権之介清康とつづき、各務郡の支配者として城之屋敷は全盛をきわめており、その後も　祐親―祐清―祐春―清春―清総―清信―清定―清近―清永―

各務野一帯（居城跡位置図）



御野國各郡各務郷
字城之屋敷

各務氏一族居城地一帯図

今昔物語書

清成ー清総ー清平ー清定ー清友ー清澄ー定友ー友春ー友秀と代々続き、戦国時代に入り、常久ー久俊ー久光ー久秋と続いております。江戸時代に入ってからも、この地の守護職を代々勤めて幕末には、村国庄建設の発起者として名が残っておる長縄八左衛門がその頃、庄屋として各務郷をおさめて居り、この館に住んでいたと伝えられて居りますが、その頃はすでに大昔のような大きな館ではありませんでした。なお、資料としては何もありませんが、これは各文献にもとづき、また寺院等の過去帳から調べた物であり、伝説として伝えられるおがせ池から出た宝剣は、元、城之屋敷の長縄家に伝わっていたものでありますので、或いは、各務氏の家宝かと思われます。また二、三点の故物、矢の根、土器、鏡等も屋敷跡より出土しております。

城之屋敷の有志によりまして昭和五十一年にこの地を永く伝えるために、各務氏居城跡の碑を建てました。なお、天野山山頂には小さな碑が建っており、これが見張り所の跡と思われます。

芥見村大洞の願成寺、蘇原の熊田北の平蔵寺は村国連氏一族が建てたものであり、蘇原山田寺は各務氏一族が建てたものと思います。蘇原に伝わる蘇我の石川磨呂は、流罪の身であったので大きなことは手掛けておりません。なお、各務の南北島、後藤正徳氏宅地の周辺から奈良時代の瓦や、土製のほこらのような物が出土しておりますので、各務氏全盛の時代には、大きな寺院があったと推察されます。

村国神社は、当所は天之火明の命をまつり、その後、村国男依を祭り後、白山大権現をまつったもので、創建以来約千四百年を経ております。代々各務氏が守護神として祈って現在に至っており

ます。

各務城之屋敷跡のことについては、城の大きさ等、一切の資料になる物が何も見つかりませんので、これ以上のことはわかりません。

狐にだまされているのを見た話

小さいころ父に聞いた。時は明治三十五年頃。ある日、朝未だ夜の明けない、うす明るくなって来た頃のこと。そこには大きな川が流れていて、木造の土橋、巾二間の県道となっていた。その橋の手前半丁ほどに差しかかった時、橋の真ん中頃に男の人がいる。よくよく見るとウロウロと左の方へ、或いは右にまた左に、何度も何度もくりかえし、「ヨッパライにしてはちょっとおかしい。」と思って、しばらく立ち止まってあたりを見ると、その橋のたもとのちょっとした石の上に一匹の大きな狐がいて、その狐がシッポを右へふると橋の上の人は右に、左へふると左にと。「これは大変だ。あの狐が道行く橋の上のオッサンをダマシておりゃがるな。コイツけしからんやつだ、石でも投げ付けてやれ。」と思い、幸い足元にあった大きな石ころをひろって、「コリャクソ、この狐め。」頭を真二つにとばかりに投げつけたとたん、これを覚った狐は、コイツ、油断のならぬ奴、一大事とばかりに飛び立ち、狐の立っていた石のド真ん中にガツンと当たり、ビックリして狐は草むらへ飛び込

み、向うの山の方へと逃げていってしまいました。すると橋の上の人は私の方へやって来たので、「あんた今先、橋の上で狐にだまされて、橋の真ん中頃へ来るとあの二間もある巾の右ランカンから、左ランカンへとウロウロと狐にだまされていたが、覚えはなかったかね。」と聞くと、「いいえ、そんなことありませんよ。まっすぐに普通に歩いて来たつもりだが、何だかそういわれるとおかしかった気がする。」「実はソレあの、二つに割れた石の上に一匹の大きな狐がいて、その狐があなたをだましていたのを私は半丁ほど向うの方で見つけ、お気の毒だと思いだんだんと近より『この狐め』とばかりに大きな石ころを投げるが早いか、狐は逸早く飛び逃げ、投げた石は狐が立っていた石の真ん中に当り、真っ二つに割れたのがあの石ですよ。それからあなたは真っすぐにここまで歩いて見えた。すぐ今のことです。」「でも私はハッキリ記憶はありませんが、何だか変なところもあったような気がします。どうもご迷惑かけましてすみませんでした、有難とうございました。」

別にケガもなくてよかったと共に言いかわし右と左に別れた。ということを幼ない子供のとき父から言われていたことを思い出してつづりました。

はがれの源さん

源さんは、細畑でも指折りの物持ちで、頭のよい人であった。十二月のある寒い日の昼ごろ、使用人の作助をつれて、羽場へ金の受取りのため出かけることになった。

通行道は、音に高いハゴカ山も近いこととて、まず命についで大切な実印と金子は丈夫な袋に入れて、ジャラジャラ音のしないように固く結んで、ふところの中へしっかり入れた。そしてマントは二人ともボロボロで、こじきの着るようなお粗末なものを引っかけた。履物は丈夫なヒヨリをはいた。

いよいよ出発。中仙道を東へ東へと進み、ついに新加納坂も通過した。一息入れて、しばらく行くとハゴカ山の方から人影があらわれた。こちらに向って四、五人は走って来るようだ。二人はギョッとした。「おいはぎにちがいない。どうしようか……。」防衛策を考えるいとまもあらばこそ……

「やい‼　きさまらはどこへ行く。」

「羽場まで。」

「気の毒だが、すっぺりぬいでもらおうか。」

「ごじょうだんを!!　こんな寒い日に、はがれたら死んでしまうわ。」
「ツベコベ言うな。まずじじいの方からやれ。」
「ヘェ!!　合点だ。」
「きたないマント着ちょるなあ!!　恥を知れ恥を!!　マントは捨ててしまって下の着物をはげ。」
「ヘェ。」
「ああ寒い寒い。」
　作助はブルブルふるえながら、すてられたマントにしがみついた。作助がはがれている間に、源さんは地面にしゃがみこんでしまった。そしてふところから、大事なきんちゃくをマントの下で手にもち、ヒヨリで一生けんめい土をほった。手早くきんちゃくをほった穴に落し、ヒヨリで土さかぶせた。死物狂いの早わざであった。間一髪!!
「ヤイ!!　てめえが主人の方か?　こいつもきたないマント着ちょるなあ!!　そんでも着物の方は少しはましだなあ!!　もらっていくぜ。」
「ああ寒い。」
思わずしらず、すてられているマントをひっかぶった。
「マントを恵んでやっただけでも、ありがたいと思ってトットとかえれ。アバヨ。」
　やがておいはぎ達は、ハゴカ山の方へ……
　源さんは、マントにくるまったまま、動こうとしなかった。

「だんな様‼　どうしなさった？」
「シッ‼　シッ‼」
そう言いながら、源さんは土にうずめた袋を、おいはぎ達に気をつけながら掘出し、しっかり手に持った。そして、
「作助‼　何しちょる？走って細畑へかえろう。」
「ヘェ‼　ああ寒い‼」
二人は走りつづけて、やっと家にたどりついた。
×××××
このことがあってから誰言うとなく、「はがれの源さん」のあだ名がついたとか。

長者様とおこんこん様

ここは、柿沢の長者屋敷のお庭。
「さと様‼　ちょっとちょっと。」
「なあに。」
「ホーレ、お堀の鯉がこんなに集まって来ましたよ。何匹いるでしょう？」

「あれ‼　一、二、三、四、五、六、七……きれいだなァー。おマンマがほしいんじゃろー。もうや‼　さともお腹すいた。お松にたのんで、お箸にジラ飴たあーんと巻いてもらって来て。」
「甘いものをそんなに召上ってはお父様に叱られますよ。」
「ないしょ。ないしょ。」
「そんならちょっと行って来ますから、桜の木の下で待っていてくださいネ。」
「早うな。」
やがて、さとは、お守りのもうやからジラ飴をもらって、なめながらお屋敷のなかを歩いていた。
少し間をおいてお昼ごろ、主人の長者様が、三本刀をさして堀をわたり、前野の方へ行こうとした。すると、向うから権助がおじぎをしながらやって来た。
「長者様‼　聞いておくれんサェー、向いの賢一さが、五日程前に隣りへ風呂をもらいに行って帰ってこんもんじゃで、みんなで大さわぎしてさがしたが帰らず、あくる日の昼ごろこの松林の中にぼんやりしちょりました。あんな利口者がとみんな不思議がっちょりました。そうしたらまた、きのう隣りの平吉さが、夕方お使いに行ったなり……平吉さはほれ、頭が一寸八厘銭じゃでなもし、みんなが余計心配しちょります。長者様‼　どうかお力をかしてくだせぇ。　お願げーします。
権助はまた、丁ねいにおじぎした。
「それはこまったなァー。何せこの辺は、松林が広すぎるからなァー。よし、　考えておこう。二、三日待て‼　」

夕方、長者様が屋敷へ帰って来ると、
「長者様!! 大変でごぜえます。さと様がまたお熱を!!」
「すぐ医者を呼べ!!」
「ハイ。」
「さとは、大事な一人娘じゃが、ああ弱くてはなあー。」
その夜、長者の夢枕に立派な若者があらわれた。
「長者様!! 私に住家をおあたえ下さい。お礼は必ずいたします……。」
長者はびっくりしてとびおきたが、誰もいなかった。ただ枕もとに、犬の毛のようなものが四、五本おちていた。
やがて長者は、柿沢の松林の中にお稲荷さんを祭る祠をたてた。
それからは、村で帰らぬ者もなくなり、さと様も丈夫におなりじゃったげな。

手力雄神社と天狗

今の手力雄神社宮司さんの曽爺様のころだった。そのころの神主さんは、大和守とかいう名前で、とても気品の高い人で、そばへはなかなかよりつけないような神主さんだったそうな。

村人に、重さという律義者で、大へん神主さんのお気に入りで、百姓の暇な時、神主さんの家へ手伝いに行ったそうな。ちょうど年の暮、神主さんに頼まれて大掃除に行ったんじゃと。神主さんは、きょうはご機嫌で「重や、今夜は一杯ご馳走するから、着かえて来るがよいぞ。」

「へい、へいお言葉にあまえて参上いたします。」

重さは家に帰り、着物をかえて、夜も静まり真っ暗の夜だったと。お宮の森の中でも、一番大きい大杉の上に、何やら空耳のように「バサリ、バサリ」と音が聞こえてくるので、重さは不思議に思って、神主さんに尋ねたら、大和守は「ほう。お前の耳にも聞こえたか。あれは心のまっすぐの者じゃないと聞こえぬがのう。それは、天狗様が団扇で鼓を打っていなさるのじゃぞ。なかなか凡夫の目には判らぬが、今夜は天狗様の機嫌がよいわい。」とお答えになったそうな。

ずんと昔は、天狗様が宮使いをしていたそうな。今では、社殿の裏山には大きな岩があるが、あそこが天狗様の遊び場所じゃったそうな。

村の年長者を尋ねたら、大杉は大人五、六人で抱えるくらいだったとか。伊勢湾台風で全部倒れたが、今でも岩は残っている。

わしらの子どものころには、正月前に熊笹がほしくて、よく行ったもんじゃ。岩の方へ行くと、天狗様に投げとばされるといって、恐る恐る行ったがなんと、いろいろ話してくれました。

私達もそれを聞いて、早速山へ登って岩を見に行って来ました。

高さ二メートル、周囲が四メートルぐらいの岩や、小さい岩も五つ六つあり、辺りには大きな木

の株があちらこちらに残っていて、遠い昔を物語っていました。

キツネと博打（ばくち）

ある時、どこの客人かわからぬ上品で、頭の禿げたおじいさんが博打場へ現われた。

村人は誰言うともなしに、名前をやかんさと呼んだ。毎晩遊びに来るうちに村人になれて「今晩は、今夜は煎餅を持って来たじょ。」「あれ、やかんさが土産をくれたぞ。」また会食をする仲間にも入って一緒に飯を食う時に「わしはあぶらぎが好きじゃで、たんとあるところを盛ってくれたんかや。」やかんさは気立てもよく、自分から進んでお使いにも行ったそうな。

「やかんさ、お使いに行ってくれんかや。」「うん、何買いに。」やかんさは戸を開けるが早いか、人間わざとは思えない早さで買物して返って来た。

「やかんさ、お前は戸を開けることはするが、閉めることはできぬかよ。」やかんさは、にやにや笑うだけ。

博打は勝ったり負けたりして、みんなに好かれて遊んでいた。

「やかんさ。あしたの晩は、傳六さの家じゃがなん。」「うんそうか。傳六さの家には、犬おるかよう。わしは犬が一番嫌いでのう。」

そのうちある晩、「やかんさ。今夜は顔色が悪いがどうかしたかや。」
「うん、わしは今度どうしても行かねばならぬことができてのう。二度とここへはこれぬかもわからぬわい。」
「そんな所へは行かずにおかっしゃれ。」「男同士の約束じゃで、仕方がないわい。」
その時のやかんさは、いつもとちがって元気なく帰った。
それから、やかんさの姿は現われぬようになった。
しばらくすると、加野の森に一匹のキツネが、腕利きの猟師に討たれたという噂があった。
なんでも、そのキツネは偉いキツネだったとか。
尾に宝の玉が付いて死んでいたそうな。それがやかんさだったかなと、村人は言った。
今でも、加野のドウジという所に小さな祠があり、商売繁昌の神として祭られている。
この話は、今からおよそ百二十年前、今の関市小屋名という所にあったことで、父の話を聞きますと、私の祖父や、やかんさといっしょに博打をした人がまだ生きているから、聞いてくるように言いましたが、半信半疑で確かめなかった。その人は九十才くらいのおじいさんでした。
今思うと、聞いておけばよかったと思います。

夜叉ヶ池

昔々、今の神戸町内のある村であったことです。夏の雨の日に、いつも祖母から聞いた話です。今年のような来る日も来る日もお天気つづきで、夕立ち雲が西の池田山にかかっても、雨は逃げていってしまい、田植え、草取りも暑い中ですました田圃は、朝から夕方までカンカン照りで、せっかくの稲も日中は葉先がかれるので、村人はつらそうに稲と空を眺めては、毎日毎日村の鎮守様に雨乞をして仕事も手につかずだった。そして人に会うと、ちゃんと雨の話ばかりだったげな。庄屋様もやっぱり村人と同じように、空を仰いでは田周りをしていたげな。この日も田圃の溝の取り入れ口も一滴の水もなく、乾いている溝の底の草までしぼんでいるのを見ると、一匹の小蛇がいたげな。庄屋さんは思わず独り言を言ったげな。「わしらがほんとうに困ってるんで、どうか一雨おくれ。聞いてくれたらお前の望みのものをあげるからなー。どうか一雨おくれ。」と困った時の神頼みで必死の思いで頼んだげな。家に帰り、しばらくすると、急に雨雲が出て空一面に広がり、ポツリポツリと降り出した。そして降るわ降るわ土砂降りに降ってきたげな。そしたら村人は喜んで雨の中を小踊りして鎮守さんへお参りしたげな。そして二、三日して庄屋さんの家へ立派な若侍がたずねて来たげな。そして家人は「私はこの間約束したように雨を降らしたので娘さんを嫁に欲しい。」と申

込んだとさ。家の人はまさかとびっくりして約束の覚えがあるので、長女に訳を話して「皆のためだから、ぜひお嫁に行ってくれ。」と頼んだが、長女はいやだといい断り続けたとさ。それで庄屋は三人娘の中の娘に一心に頼んだら、中の娘は「では、私が行きます。」と承知したげな。両親は大喜びで一安心して仕度を整えて二人を送り出したそうな。家の東を南へ流れる揖斐川へ降りると若侍は川原で白蛇に変身し、娘を背中に乗せて上の方へ川を登って見えなくなったとさ。そしてしばらくしてから二人は人の姿で里帰りをしに帰って来たそうな。家では大喜びで迎えたげな。そして寝る時に娘は「どうか私達の部屋を見ないでくれ。」と堅く断って寝室へ入ったそうな。が、止められれば余計見たくなるので、しばらくしてから、そっとすき間からのぞいて見ると、これはどうだ。人の姿はなく二匹の大蛇が部屋一ぱいの水の中に居たそうな。びっくりして、ふるえてくるのをこらえつつ朝を迎えたそうな。朝起きて二人は感づかれたとわかったらしく、「もう二度とはお目にかかれないでしょう。」と別れを告げて帰り、これが最後で遂にその後は来なかったげな。けれども、今でも日照りで困るときは村の人はもちろん、遠い村の人でも庄屋さんの子孫が石原さん方へその大蛇が住んでいるという伊吹山の北の県境の川上村にある夜叉ケ池へ雨乞に行くようにお願いに行くそうだ。私も子どものころ、日照りつづきのとき村人がお願いするとの話があったげな。この話は西濃地方のお年寄りに聞き伝えられている。

お庄屋さんは神戸町の旧家で安次部落で石原伊兵衛さん。お家でも庭の隅に夜叉ケ池によく似た池があり、水底は黒く沈んで見えない。そして芸人さんがお詣りするとか。この話は昔々のこ

とだと祖母から聞かされました。そのころ、夜叉が池は人がめったに行かない山の中の池だが、人が木の下の道のない所を難儀して行くと木の上からポタリポタリとヒルが上から落ちて来て、血を吸うので困ると聞いた。私どもはヒルは水の中にいていつも吸いつかれるので、水の中ばかりと思ってるのに、木の上に住むのを不思議に思い聞いていました。

狐の思い出

私が大正の初め頃、村の小学校へ通った頃のことです。今も県花はレンゲであるように、昔は春三月終りから五月初めは輪中地帯の春は蓮花、菜種、麦類の花が入り乱れ、通学道をはさみ一ケ月余りは美しかった。伊吹颪も止み、ポカポカと日中帰る時は、二、三人ぐらいで帰るのだから睡気がさし、ついつい歩きながら居眠りし、道端の草につまづき眼がさめる日が続きます。この頃祖母等は眠らず、しっかり眼を開けて帰れ。すき間から狐がきてばかすんで、気をつけて話ししながら帰れよ。見つけても小便をかけたり、石等を投げるなよ。狐はしかえしが恐ろしい。もし小便等かけると狐は汚れて稲荷大明神になれないのだから、しかえしが恐ろしい。決して眠らずに帰れと、春になると繰返し聞かされました。

また四、五才位の時、隣の分家の鶏がやかましく騒ぎ立てる声が聞こえるので、鶏のいる小屋の

ひさしの方へ近づくと一匹の狐が一メートルほど離れてポカンと立って、鶏どもがけたたましく飛びたつように鳴いてるようすを見ていたので、こちらも驚き何か声を出したらしいが覚えがない。そこで狐も驚き、背戸の菜種田の中へ去りました。ほんとに昔の春は一面の色美しい田面が広く広く連る中に、藁屋根の農家が点々と遥かに西に伊吹山、北は白山、東は金華山で、遠くは春霞みで見えない長閑な田舎の村のことで、一人で若い衆が田圃道を通ると石碑の所の一本松の狸が、人が下げてる提灯の火を消して、いくつもいくつも提灯のような灯が中で動いて歩かせるので困ったと村の人が話した。身近くまで近づいたしるしとのことを聞かせてくれました。

今須村妙応寺の建てられた由緒

広い濃尾平野も西の山裾で終り北側の伊吹山脈とのあいまを中仙道が西の江洲へと、登りきった所に関所で名高い不破の関があった。今は関が原と合併している今須は急な坂をおりた所にある村のお寺です。直ぐ江洲で右側に裏山を廻した古いお寺が、蒼然と建っています。

昔々ここは山また山で田畑がなく、村人は山持ちの山仕事か、樽桶を造る製材に使われて暮す豊かに遠い村だったそうです。この話は祖母に小さい頃に聞かされたことです。それは昔鎌倉幕府の頃、この村の庄屋様のお婆さんはとても欲が深くて、人が困っていても情容赦もなく村人が油・米

等を借りに来ると枡を大小用意して、貸す時は小さい枡、返しに来た時は大きい枡で受取り村人の噂を知らぬげに貸していたそうでな。この老婆も寿命がきて遂に亡くなられたそうで。その後或る有名な坊様が中仙道を通られて折柄、夕方になり宿屋はなく困った揚句、山裾の木の下を仮寝の宿として座禅をくみながら読経しつつ、うつうつされていた。　ふと物音に眼が覚めると、眼前の林の中に白衣の老女が、髪ふり乱しつつ何か呪えつつ、手探ぐりで物を探すように足下も覚付かない様子で立っていました。旅の僧はやさしく言葉をかけて尋ねますと、老母は有難うございます、よくお尋ね下さいました。私はこの村の庄屋の者でしたが、生前は村人に情容赦もなく強慾なことをして恐れられていました。三年前に世を去りましたが、生前の報いで、私は行くところに参ることができず、こうして毎日毎日探し求めています。どうぞお助け下さいますように、手を合せて何度もお願いしました。旅僧はそれならば私のこの衣の袖に入りなさい。お手伝しようと衣の袖を大きく広げて老婆を包み読経を続けました。暫らくして老女はありがとうございました。これで私も参らせて頂くことができます。と厚く厚くお礼を述べつつ衣の中から西の方へ飛立ったそうな。旅僧は翌朝庄屋方を訪れ、昨夜のことを話し伝えたと。家族の人はお婆さんがそんなことだったのかと驚きながら厚く旅僧にお礼を言い、亡母の菩提をとむらいたい。是非あなたもお力添えをとお願いしたので、旅僧はこれも何かの因縁と言い何かを助言されたと、お手の物の材木ですぐにお寺が建ったそうだ。いま古色蒼然と残るこの妙応寺の由緒だそうで、この寺の本山は鶴見の総持寺です。祖母の先祖は鎌倉幕府で長井別当だったとか、この村里近くへ落

ち延びて住んでおり、共にお手伝いさせて頂いたと祖母は親から語り伝えられたと話してくれました。お寺の前の中仙道を十分も西へ行くと車を返された所とか。そして直ぐ西のほんとの県境には寝物語の里と言い伝えられる所。これは昔、江洲とこの美濃境は山も川もで境はなく、街道つづきで家が並んで建ち、或る月見の夜、江洲と美濃の人が寝ながら差入る月を眺めつつ話をしたと言い伝えられたので寝物語と言われる由。

狐にばかされた話（一）

私が四才の時、亡くなった祖父から聞いたお話です。祖父が中年のころ、親戚（今の名神養老エリヤの南西の山裾の村）を尋ねるとき、牧田川は急流でしかも大水。橋はいつも流れるので平水の時は、仮橋が掛けられている。その橋を渡り、竹藪の長くつづいている土手を降りて田圃のところまで行くと、その田圃の中ほどのあぜ道をお百姓のお祖母さんがあっちへ歩き、又こちらへ戻るとの繰返ししてるのが見えたので、暫く見てる中に、これは狐のいたずらと思い辺りを見廻すと、藪かげで一匹の狐が尻尾を右へ左へふり廻しているのを見つけた。ああこれだと思い、かねて聞いているので狐には相手にならず、大声で「お祖母さん何をしているんか。」と話しかけると、お祖母さんは立ち止りきょとんとして、祖父に「さっきから家に帰る道が判らなくて困っていました。漸く判

ったわいなぁ。ありがとうございました。」と繰返しながら帰られたげな。狐はと見ると、こそこそと藪の中へ逃げて行ったげな。

狐にばかされた話（二）

これは祖母の末弟で亡父と同じぐらいの大叔父が隣村の小学校へ勤めていた時のこと。養老山麓なので山裾を北西から南方へと通っていたそうです。ある時、帰りが遅くて春の頃だったか暗い道を　灯もなしで、村へ向って帰って来ると途中から、どうしてもいつも通る道と様子がちがい村境に着かぬので、不審に思いながらも歩き歩き続けていたと。そうすると灯が見えたので、喜んで灯を見当てに行くと一軒の宿の灯だった。そこで喜んで私はと村名を告げ、「いつも通う道が判らなく困ってるがどちらでしょう。」と尋ねると、家人は顔を眺めて「あゝあんたは隣村の先生ではないか、それは狐にばかされんやしたのだ。家まで送っていこう。」といって村まで送って貰って家に帰った。その頃は道がはっきりと判っていたと。二人でばかされたなあと話ししながら送って貰って帰ったと祖母が話していました。

孝行物語

六十才になったら捨てる掟

大昔、尾張の古知野近くに、うんと親孝行な三太という息子があったげな。三太は年をとったお婆とお嬶と九人の子どもがあって、その暮しは貧乏で、三度の飯は二度にするようなひどいもんじゃった。村の衆は、あそこの婆さんも六十になったら、地獄洞に捨てりゃ、少しは楽になるのじゃと噂があった。

この国の掟も、信州と同じように、年寄りが六十になると山奥の地獄洞に捨てに行くことになっているので、嬶や子どもも早く婆を捨ててしまえば家も広くなるし、食うものも助かるので、六十になるのを指折り数えて待ったそうだ。ちょうど六十才の誕生日がきて、婆さんを捨てに行くことになり、村の庄屋さんや親戚の者が、お別れのご馳走をもってお祝いにきて、お婆さんもめでたいこと六十になって地獄洞へ行けるぞな、とみんなで婆さんにお祝いをいってご馳走を食べさせて、三太の背中におんぶさせて見送ったそうな。

ところが、三太は腹の中で婆さんを捨てる気は少しもなかった。「これ、三太どこへ行く。地獄洞へ行くとは道がちがうがや。」と。「おかあよ。わしは捨てる気はちょっともないのじゃ。」

「なんじや、そんとこてしたら、おんしも、うちじゅうみんな村八分になって、お役人に殺されるぞな。」と、「まあえ、おれにまかせておきんさい。」と。三太は川を越え、山道を抜けて、大師様のある妙喜庵に婆さんを連れてきて、本堂の床下にあった穴倉に隠して戻ってきた。

さあ、それからがおおごとで、毎晩夜になると、嬶や子どもたちが寝静まると、自分の食べ残した飯や芋を持って、五、六里もある妙喜庵の婆さんの所に運んだそうじゃ。こんなことは、ただの人ではできることではないぞな。それを三太は殆んど毎晩続けたらしい。

そのころ、お殿様が、奈良から帰ってみえて、えろう風流なお方で、とても謎解きがおすきじゃったそうじゃ。

お殿様の出された難かしい謎

あるときお布令を出して、同じ太さの木のウラとモトを見分けることができる者には、年貢を減らしてやろうという難題の謎がだされた。三太はその夜、寺の床下の婆さんに逢ったとき、その話をすると、婆さんは、じっと眼をつむって考えていたが、「それは水に浮かせるとええ。モトは沈んでウラは浮く。」と云った。

三太は、早速明くる日にお城へ行って殿様に申し上げた。殿様は家来にいい付けてそのようにさせると、全くその通りであった。こんどは三太に、お前は見事に難問を解いたので、それでは同じ大きさの馬はどうして、親と子を見分けるか考えてくるようにと申し付けた。

三太は、その晩に婆さんに会ってその話をすると、婆さんは、また眼をつむり考えていたが、「そ

りゃ飼い葉をやればすぐわかる。親馬は子馬に食わして、じっと横から見ちょる。」と。三太は明くる日、殿様を訪ねてそのことを申し上げた。また家来が試してみると、三太のいう通りであった。そこでまたお殿様は、「こんどは謎を解いたら、おまえの望むことをなんでも叶えてやるぞ。そのかわりこれを解けないときは、おまえの舌を抜いてしゃべれないようにするが、どうじゃ。」と。三太は恐ろしくなって顔の色を変えたが、もしこの謎が解けたら、婆さんの命乞いをしてみようと思ったので、「よくわかりました。そのかわり、その謎が解けたら、どんなことでも聞いてくださいますか。」と。「わしはこの国の主じゃ、嘘はいわぬ。」それじゃその謎をいってください。」と。「ではよいか、藁の灰で縄を造って持ってこい。」と。

三太は、これはえらいことになったと思ったが、できないときは舌を抜かれるし、婆さんも助からんので、その晩蒼い顔をして、床下の婆さんを訪ねていった。婆さんは、いつものように眼をつむり聞いていたが、考えてから、「それは藁を縄になって、それを皿にのせて焼いたら、灰の縄ができるから、それを持っていってみよ。」と。三太は婆さんのいったとおりに、灰の縄を皿のまま殿様の前に持っていった。殿様はそれをみて、三太の智慧のあることにたまげてしまわれた。

三太は頭を地べたにすりつけて、おいうは、お婆の命を助けてやりたいばかりに、地獄洞に捨てる掟にそむいて、婆さんを妙喜庵の床下に隠してあることを、涙とともに話したので、殿様はかえって、三太の親孝行をほめられて、沢山の褒美をやり、三太の婆さんを許しただけでなく、それからは、姥捨ての掟を改めて、どこの家の婆さんでも死ぬまで一しょに暮すことになったそうな。

各務原の石神さま

昔の各務原は、どこまで行っても、すすきやはぎが茂って、さびしい野原でした。この野原の一本道が、隣村のゆききや、車を引いた百姓が通るただ一つの道でした。

ある日のこと、柿沢の男が岐阜に行った帰りに、草花の咲き乱れた小道を、せわしく歩いておりました。すると足の裏に、何かこつんとさわったものがあります。思わず「あっ、いたい。」と片足をあげて見ると、わらじに小石をはさんでいました。「なんだ、ちんびきさい（小さい）石じゃ。」と小石をつまみあげ、ぽいと投げ捨てて、すたすたと歩き出しました。

「あっ、いたい。」また小石がはさまっています。「さっきの石とそっくりだ。おかしなこともあるもんじゃ。」ぽいと投げ、すたすたすすきの道を歩いて行きます。しばらくすると、「あっ、いたい。」それは例の小石でした。「おりょりょ。」手にとって見ると、前よりも大きくなって、こぶしほどになっています。男は思いきり力をこめて、遠くの萩の茂る草むらに投げこんで、小走りに急ぎました。

境川の橋を渡るころは、うす暗くなっていました。わが家が近くに見えます。軒先までくると、例の石が家の中へ転がりこむのが見えました。障子の破れ穴から部屋の中にとびこみ、神棚のお燈

明をくるりと回って、祠の中に入ってしまいました。「あっ。」と男はたまげて声を出しました。「どこへ行かしゃったんじゃろう。」とあわてふためいて、おどおどしています。青い顔をして立っているおとうをみて、おかあは、「だれぞ、ござったんか。」と流し場で、洗いの手を休めてたずねました。おとうがわけを話すと、二人は思わず顔をみあわせてふしぎがりました。

それからこの家では、よいことが続いたといいます。

おのぶ様と狐

昔、各務野の、こんもりした森の中に、一ぴきの狐がすんでいました。とり入れもすんだ秋も深いある日のこと、いたちが、沢山の鶏をとってくるのを、その狐が小山の上から眺めていました。ある日、狐はいたちに、「おいおい、お前はどうして鶏を取るのがうまいんだ。おれにも知らせえ。」と頼みました。するといたちが、「ぞうさないことさ、人間様をだますだ。まんず、戸のすきまに尾っぽを突っ込んで、ぶらぶら振るんだ。すると、ころんと人間様は眠ってしまうだ。仕事はそれからだ……。」と教えました。

この森の近くに、おのぶさまと呼ばれる一人のばあさまが住んでいました。秋も深まったある夜ばあさまは、いつものように、びいんびいんと糸をつむいでいました。すると「とん、とん、とん」

と戸をたたきます。こんどは雨戸の大きなふし穴から、尾っぽがでて、ぶらり、ぶらりとゆれています。これを見ていたばあさまは、しっ、しっとつばを飛ばして、「こら、わるさするでねえ、さっさとかえれ。でないとひでえ目にあうぞ。」と声をかけましたが、尾っぽはゆれています。ばあさまは、ごうをにやして、狐の尾っぽをぎゅっとつかみました。

おどろいた狐は、これはたいへんとあわてて力いっぱい引っこめます。ばあさまは、いよいよ力まかせに内からひっぱります。そのうちに、尾っぽがぶつんと音をたてて抜けてしまいました。狐は、「尾っぽが抜けた、げえ、げえ。」と泣いて、尾っぽのない尻をかかえて泣き悲しんでいました。そこへ、いたちがやってきて、その様子を見て笑いこけました。

「いいきみだ。人をだましたりするで、ばちがあたっただ。」といたちは、面白半分にからかいました。それでも、気のいいいたちは、赤肌になった狐のお尻をみて、かわいそうになりました。

「おい狐、いたちの糞を、三年つけるとなおるぜ、どんどと、ばあさんとこへ行って、尾っぽを返してもらえよ。」といいました。その日も、ばあさまは狐の尾っぽをかたわらにおいて、びん、びんと糸をつむんでいました。戸をたたく音がします。外は暗闇でした。

「おのぶさま、お願いだから、わっちの尾っぽを返してくれよ。」とあわれな声で、狐はばあさまにたのみます。ばあさまもふびんに思い、「おまえ、こんりんざい、わるさするでねえぞ。」といいきかせて尾っぽを返してやりました。

狐は、三年たって全快し、わるさをしなくなったということです。

いも掘長者

昔、各務野の里に若い男がすんでいました。背は高く、髪は黒々とし、それは美しい若者でした。山の近くに掘立小屋を建てて、毎日山の中からいもを掘り、犬山の町へ売りにでては、暮らしをたてていました。乞食のような身なりをしていますが、根が正直で信念が深く、心のきれいな若者でした。ある日、いつものように芋掘りに山へ行きました。今までに見たこともない大きなジネンジョを見つけました。「ありゃ、これは大変な芋だわい。」と若者は大喜こび、さっそく気をつけながら掘りかけました。すると「カチン、カチン」と鍬の先に固いものがあたりました。手答えが小石とはちがいます。「何かあるぞ、面倒なことになりそうだ。」とひとりごとを言いながら掘り出して見ると、こぶしほどの丸いきれいな玉が光って出てきました。「これはおかしな物が出たわい。」と泥をぬぐいとって、大切に家に持ち帰りました。信心深い若者は、神棚に供えてまつりました。

その頃、名古屋に何代か続いた大きな商家がありました。その末娘は町中きっての美人でしたが、嫁入り先に居つきません。こんどで五人目ですが、八日たってまた戻ってきました。「持参金まで持たされるさかいに、しょうがないや。」と父親は不機嫌です。「そうどすなあ、娘はきりょう良しと思うのですが、何が不足どす。」と母親は、いたって不満顔です。

「どうです。今評判の易者に見せなったら。」と大番頭が恐る恐る申し上げました。「うん、そら名案や。」と相談がまとまりました。そして、易者にその事情を事細かに話しました。「それはあんさんお困りですな。どれ、ご祈とうしてみましょう、しばらく……。」と奥に消えました。やがて易者は出てきて、「怨霊が出ましてな。お宅の地の神さまの下に、こぶしほどの美しい玉が眠っていなさる。それが地上に出たくてな、掘ってやんなされ。これと同じ玉を、各務野の里の芋掘りの若者が持っていなさる。娘さんは、その方と夫婦になれば幸せになりますがな。」と申しました。両親は大変喜びました。娘に掘り出した玉を持たせて、旅仕度をととのえて、町のはずれまで送ってやりました。

娘は終日の旅の末に、やっとのことで各務野の里の掘立小屋を見つけました。娘は芋掘りの若者に易者の言った言葉をこまごまと話しました。そして娘は、自分の家の地下から掘り出した美しい玉を袋から取り出して、顔を赤らめながら芋掘りの若者に嫁にして下さいと頼みました。「鍋ぶたのないような貧乏人じゃが、わしの嫁になってくれるとは、うれしいことじゃ。」と若者はうれし涙で申しました。

それから、夫婦仲よく一生懸命に働きました。そして大変なお金持ちになり、芋掘長者といわれ長く幸せに暮らしたということです。

郷土の方言と民話　探訪記

高齢者大学院本年度の研究テーマは、郷土の方言と民話を集め、一冊の本として後世に伝えようということになり、大学院生二十四名、それぞれ自分達の知人や長老を尋ねて、言い伝えられた昔話やその土地の方言を大分集めては来たが、もう少し集録できないだろうか。それにまた一人一人の語りかけよりも、二、三名のグループで各人各様の話題の持ちかけかたをすれば、そこに自ら巾のある話が得られるのではないだろうか……などの理由で、グループによる探訪ということを長沢先生が発案され各地区の寺、長老を主体に大学院生がグループをつくり、それぞれの寺や長老宅を訪問して話を聞き出すこととなり、十二月七日左記のような班ができ探訪取材することになった。

那加地区　第一班　宇野ちよ　浅野あきえ　浅野ひで　三名
訪問先　覚五寺　大願寺　正厳寺

那加地区　第二班　今尾　坪内　中村　岩田　平光　中山　六名
訪問先　観音寺　不動寺

稲羽地区　第三班　松尾松司　森巌　二名
訪問先　宝林寺　長老宅

鵜沼地区　第四班　坂井　早川　桜井　三名　集合場所　生涯教育センター
訪問先　空安寺　正法寺　第二学習室　出発時刻十時

蘇原地区　第五班　永田　木村　柳原　佐曽利　四名
訪問先　無染寺　河野行念寺

その一

さて、いよいよ出発となると近くは徒歩で行く班、または電車で、あるいは自動車で、思い思いに目的地に大きな期待をもって向った。ところが各班が取材を終えて後日の報告によると、なかなかそう簡単には話は引出せず、大へんな苦労をしたとのことだが、それでも各班二、三の民話や昔ばなしを集録することができた。そのうち二、三の苦心談を紹介することにしよう。第一班の浅野グループは徒歩で長塚町方面に行ったが、目的の寺は家人が留守でだれにも会えず、犬に吠えられて退散のやむなきに至り、相談の結果、浅野さんの知人で浅野儀作さん宅を訪れ、寛政元年（西暦一七八九年）ごろ建立されたというお地頭さまの由来を昔ばなしとして取材できた。なお、そのとき耳にした近所の手力雄神社の裏山に天狗が住んでいて、人々にいろいろな悪さをしたとのことで、それにまつわる伝説の天狗岩を確認しようと、その神社の裏山に登ることにした。ところがタラの木のとげとげの林の中をかき分け踏み分け手足を傷だらけにして行かなければならなかった。暫く行くと、しめ縄の張ってある大きな岩を見つけた。ああ、これが伝説の岩かと一同汗をふきふき確